自由討議

（テーマ:【英語教育】ALTの活用状況について）

1　ALTの役割及び配置等

（1）役割　ALTは基本的には担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業にかかる補助をする。

（A）授業前

学校（担当教員）が作成した指導計画・学習指導案に基づき、授業の打ち合わせを行うとともに、教材作成等を補助する。

・授業の目的、指導内容を理解

・指導手順、指導の役割分担、教材等を把握

・教材作成やその補助

（B）授業中

担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業を補助する。

（役割の例（言語活動における児童生徒に対する指導の補助））

・活動についての説明、助言、講評

・言語モデルの提示

・音声、表現、文法等についてのチェックや助言

・児童生徒との会話

・母国の言語や文化についての情報の提供　等

（C）授業後

担当教員と共に、自らの業務に関する評価を行い、改善方法について話し合う。

1　ALTの役割及び配置等

（2）ALTの活用　①活用状況

〇ティームティーチングの実施

→日本人英語教員と協力し、授業での効果的な指導を行っている。

〇複数校への派遣（幼稚園、小中高等学校へ）

→学校間でALTを共有し、英語教育の充実を図っている。

〇スピーキングテスト（中学校）や国際交流会（小学校）

スピーキングテストや異文化交流を通じて、児童生徒のコミュニケーション能力の育成。

〇長期休業中の特別プログラム

・小学生対象：「Jump High! ALTとオンラインで話そう！」

・中学生対象：「イングリッシュデイ」

→生きた英語に触れる機会を提供し、異文化理解を深める。

〇派遣協力

・国際交流会館主催：小学生対象：春・夏の「英語クラブ」

・英語研究会テスト作成補助

・スピーチコンテスト審査員派遣

・市団体、ビジネス専門学校などへの授業協力

1　ALTの役割及び配置等

（2）ALTの活用　②教育効果、③課題、④改善策

②教育効果

〇ALTとの交流を通じて、児童生徒の異文化理解を促進。

〇コミュニケーション能力の育成に寄与。

③課題

〇学校間でALTの活用度に差がある。

→質の高いティームティーチングを実現するために、英語教員の研修充実が必要。

④改善策

〇英語教員とALTが共同で研修に参加し、相互理解を深める（指導力向上研修）。

1　ALTの役割及び配置等

（3）ALTの研修

①毎月のALTミーティング

〇勤務形態の説明（服務、メンタルヘルス、休暇、イベントなど）

〇課題・問題の共有

〇授業などプレゼン発表（研修の紹介、校外イベントの紹介等も）

②ALT外国語指導助手研修

〇県下一斉のALT集合研修（ALTの発表）

・講師招聘し、全国の実践共有、各分科会での実践発表

・英語教員（JTE）も参加し、ともに学ぶ。

（R6年度）
・鳴門教育大学教授ジェラード先生の基調講演
・パネルディスカッション
・分科会討議（メンタルヘルス、授業課題、コミュニケーション、指導法について）
→ALTがパネラー、発表者。英語教員とともに、英語で討論へ参加。

③JETプログラムALTハイレベル研修

〇外務省等が主催する研修に、毎年、数名のALTを派遣し、指導法を学ぶ。

④民間委託ALT研修との合同ALT研修

〇民間企業の講師が指導助言（昨年度から学期末実施）。

1　ALTの役割及び配置等

（4）ALTの配置

ALT人数	JET…54名／民間委託…10名
配置・派遣状況	小中高等学校に配置、幼稚園、特別支援学校へ派遣。（一財）自治体国際化協会が実施する「外国青年招致事業（ＪＥＴプログラム）」による招致及び民間からの派遣により外国語指導助手（ALT）を市立の全ての小中高等学校に配置。
報酬額（時給、日給、月給）	JETプログラム年数に基づく報酬…月給28万～33万、その他通勤手当
勤務時間	8時15分～16時00分（1日7時間45分）、休憩45分

2　ALTへの質問コメント

日本の英語教育について、どう思いますか？

日本の英語教育は、全体的にうまくいっていると思います。
小学校5年生から週に複数時間、専科として英語を学ぶ仕組みは、生徒の学習にとって非常に良いことです。また、標準化されたカリキュラムは、異動の多い英語科教員（JTE）にとっても役立ちます。これにより、理論的には、日本のどこにいても、学んだ英語を他の日本人の友達と使えるようになります。
さらに、ALTを授業に活用することで、英語教育が楽しくなり、ターゲット言語のネイティブスピーカーが相談役としていることは大きな助けになります。
しかし、中学校では、授業が「試験対策」に偏りがちで、高校入試に合格することが主な目的となり、外国語を楽しむことや実際の運用力を高めることが後回しになってしまうのが課題です。（レベッカ）

日本の英語教育は試験重視であり、これは学校の入試や受動的な理解力（読む・聞く）には有効です。しかし、その一方で、記憶から話したり書いたりする「能動的な（話す・書く）言語スキル」を育てるのが難しくなっています。
言語は使うことで定着しますが、教えた内容の復習がほとんどありません。記憶するためには、同じ内容を複数回見ることが重要です。小学校で宿題をもっと出すことは有益だと思います。（リンデン）

日本の英語力はかなり低いと思います。それが教育制度の問題なのか、日本社会の文化的な特徴なのかは分かりません。
日本社会は「個人主義」や「失敗すること」をあまり好まない傾向がありますが、これらは言語学習に不可欠な要素です。（グレイス）

2　ALTへの質問コメント

ALT（外国語指導助手）と日本人教師（担任、英語科教員、専科など）は、うまくコミュニケーションが取れていると思いますか？

ALTとJTEや専科の先生とは、概ねコミュニケーションが取れています。
ただし、小学校の担任（HRT）とのコミュニケーションについては、ALTから「うまくいかないことがある」という報告もあります。（レベッカ）

ALTとJTEや専科の先生とのコミュニケーションは、概ね問題ありません。
しかし、ALTと担任（HRT）との関係は、妥協がないと難しい場合があります。担任の先生は、ALTと協力することに消極的なことが多いです。（リンデン）

ALTと教師は、基本的にコミュニケーションが取れていると思います（言語の問題はほとんどありません）。問題は、個人の意欲です。つまり、本人がコミュニケーションを取りたいと思うかどうかです。（グレイス）

2　ALTへの質問コメント

現在、ALTにとってうまくいっていないこと（英語の指導、JTEとのコミュニケーションなど）には、どんなことがありますか？

一部のALTは、英語に自信を持って話せない小学校の先生とのコミュニケーションに苦労しています。これが授業準備や進行を難しくする要因です。
また、英語に自信がない先生は、ALTに授業の主導を任せようとすることがありますが、これはALTにとって大きな負担であり、本来の役割から外れています。
さらに、職場文化の違いも問題です。多くの欧米の国では、良かった点や改善点について直接フィードバックを受けることを望みますが、日本では指摘や助言が失礼とされるため、率直な意見交換が難しいです。
その結果、ALTは「同僚の本音が分からない」と感じ、信頼関係が築きにくくなり、誤解が生じることがあります。
実際には、誰もが「仕事をうまくやりたい」「仲良くしたい」と思っているのですが…。（レベッカ）

忙しすぎる先生とは、コミュニケーションが難しいです。特に、ALTが日本語を話せない場合、先生が「面倒をかけたくない」と思い、協力しないことがあります。
懸念やメッセージをプライベートに共有できるプラットフォームがあれば、邪魔にならずにもっと良いコミュニケーションができると思います。（リンデン）

ALTは「仕事量が多すぎる」か「少なすぎる」かのどちらかになりがちです。負担の差が非常に大きいです。もっと仕事をしたいと思っていても、カリキュラムの制約や時間の制限でできない場合があります。（グレイス）

2　ALTへの質問コメント

将来、生徒が英語を話せるようになるために、最も必要なことは何だと思いますか？	子どもは幼いほど言語習得が得意なので、英語教育をもっと早く始めることが有効かもしれません。6歳を過ぎると新しい言語を学ぶのは難しくなります。 また、日本政府が国語の授業で「訓令式ローマ字」から「ヘボン式ローマ字」に変更を検討していると聞きました。この変更は、英語学習にも役立つと思います。システムが統一され、混乱が減るからです。 現在、日本の生徒が英語学習で直面している最大の障害は、AIの存在と恥ずかしさだと思います。 AIについては、多くの生徒や教師が「翻訳ソフトやAIがあるから外国語を学ぶ必要はない」と考えています。しかし、外国語学習は脳のトレーニングであり、数学や歴史と同じように重要です。他言語を学ぶことで、自分の言語理解も深まります。さらに、AIや翻訳ソフトは不完全で、誤訳も多いため、過信すると危険です。 最後に、日本人は「間違えないこと」を重視しますが、この姿勢が外国語学習を難しくしています。外国語を学ぶことは、上手でなくても価値があります。失敗しても挑戦し続けることが大切であり、間違えることは悪いことではありません。むしろ、間違えながら学ぶことが推奨されるべきです。（レベッカ） もっと「アウトプット」に重点を置く必要があります。具体的には、**話す力（スピーキング）と紙に書く力（ライティング）**です。（リンデン）
	自信です！ 間違えても完璧でなくてもいいという自信が必要です。人と話すこと、新しいことを経験することが大切です。言語は「新しいことを体験するための道具」として教えるべきです。楽しいものですし、世界観を広げる方法です。 ただ「テストに合格するため」ではなく、例えば「自分の趣味を別の言語で楽しむ」ことができるようにするべきです。単なる「授業のための勉強」ではありません。（グレイス）